

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十一卷「社会科学（一の一）」

世界の国家形態と地政学および日本の国体（憲法、天皇、主権者たる
日本国民）と地政学（日本列島、日本海）、国体論

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十一巻を成し、岩崎の言語の著作のうち、世界の国家形態と日本の国体、および地政学に関する著作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳く十九歳

第二編 二十歳く二十九歳

第一部 地名・ノスタルジー・人を慕う心

第二部 マルクス

第三部 小室直樹

第四部 私の思う「愛国心」や「愛郷心」について

(編集)

愛国精神と私

我が国家論

国体の本義 天皇国体の再確認

国家運営

天皇

国家の本体と仮体

帝国憲法と天皇機関説

日本的立憲君主制の現状とその是非

最新の天皇 象徴天皇制と「個人としての天皇」

第三章 日本国憲法

第一節 無国籍憲法

第二節 国旗及び国歌

第一章 故郷岡山と私

第一節 ふるさとの定義

第二節 岡山の特色

第二章 岡山弁

第一節 「きよーてー」と「けうとし」

第二節 岡山県民の口腔

第三章 岡山の巫女神道

第一節 近代社格制度

第二節 社家

第二編 故郷と日本

第一章 富士山と日本人

第一節 天皇と富士山

第二節 見立て文化

第三節 日本海

第四節 竹島

第四節 太平洋

第五節 河川

第三編 人間のふるさととしての母胎

第一章 胎児感覚

- 第一節 三木成夫の着眼点
- 第二節 内臓感覚
- 第二章 ノスタルジィ
- 第一節 聖母マリア的母性愛
- 第二節 ヒュズン
- 第三節 日本の母
- 第三章 「日本」の定義
- 第一節 日本の国体 日本とは国会 三権元首は衆議院議長
- 第二節 日本の国境
- 第三節 日本の国民 日本とは国民
- 第四節 日本の民族
- 第五節 日本の言語 国語サピア
- 第六節 日本の天皇
- 第三編 三十歳〜三十九歳
- 第四編 四十歳〜四十九歳
- 第五編 五十歳〜五十九歳
- 第六編 六十歳〜六十九歳
- 第七編 七十歳以降
- 第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの
- 第九編 著作者が岩崎純一であるもの



第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 地名・ノスタルジー・人を慕う心

二〇一〇年十二月十二日 起筆、攔筆、公開

僕が思想的に影響を受けた歌人の塚本邦雄は、義兄に手紙や年賀状を書くときに「法悦に近い歓びを覚えた」と随筆に書いている。義兄の住所が「京都市伏見区深草極楽町」だったからだ。

（写真は、岡山市中区中納言町の小橋駅〜中納言駅の街並み）

地名に底知れぬ感慨を覚える癖は、僕も子どもの頃から全然変わっていない。僕も塚本邦雄の言っていることに本能的に共感できる性質である。

僕の地元岡山市が昨年四月に政令指定都市に移行したとき、市の意向で「北区」「中区」「東区」「南区」という区名が採用された。と思いきや、市民自身が市との論争に疲れ果てたのか、最後には市民アンケートでもこれらの区名がトップに選ばれた。「旭川区」などの由緒ある地名は却下された。

今年も年賀状の季節がやってきたが、地元への封書や年賀状に住所を書く楽しみや、地元への郷愁・懐古の情というものが、だんだんと自分の中から無くなりつつある。

例えば、岡山南高校は北区にあり、古くからの西大寺地区は東区にあるなど、もうグジャグジャになってしまったわけで、「ああ、あの人が住む、岡山市北区の東の西の南よ・・・」などと感慨にふける他県民がいるだろうか。どうにも恥ずかしい思いがする。

二〇〇六年のノーベル文学賞受賞者のオルハン・パムクは、『イスタンブール』の中で、トルコ人の持つ憂愁・懐古・郷愁・ノスタル

ジーを意味する「ヒュズン」について書いている。「イスタンブール」や「ボスポラス海峡」という語には、トルコ人なりの哀愁の響きがある。少なくとも、そのようなヒュズンが、色んな事情があるにせよ、岡山市にもあつて欲しかった。

仙台市や川崎市は偉いと思う。「泉区」「青葉区」「宮城野区」「太白区」「若林区」、そして「川崎区」「幸区」「中原区」「高津区」「宮前区」「多摩区」「麻生区」。川崎市の区名は、他の政令指定都市にはない。

仙台市や川崎市は、ノスタルジーがどういふものか、地名が人間の文化にとつていかに重要なものか、まだ分かつていると思う。岡山市では、路面電車の駅名がまだ命綱で、「清輝橋」「柳川」「城下」「小橋」「中納言」「門田屋敷」「東山」などがある。

僕の場合、地元の地名のように、自分以外の力によって自分の中から奪い取られていく哀愁・郷愁のようなものを保つのに、使っているものの一つが、やはり和歌なのだ。

和歌に多用される地名は「歌枕」と呼ばれる。京都「深草」は言うに及ばず、仙台市宮城野区の名となった「宮城野原」は、由緒ある歌枕だ。「青葉」「青葉山」という名は、元は京都にあり、和歌で「青葉」「青葉山」と言うとき、多くが京都のそれを指すが、「青葉」が区名になっているのは横浜と仙台である。

深草の里の月かげさびしさもすみこしままの野べの秋風（源通具）
立ちよれば涼しかりけり水鳥の青葉の山の松の夕風（藤原光範）

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原（西行）

遠くの人を思うために地名があるわけではないけれども、地名が遠くの人への思いを引き出し、確認させてくれることがある。それが地名の力だと思う。

故郷の風景やあぜ道や路面電車や地名を見て「恋しい」、「寂しい」、「懐かしい」と思うことは、いわば一種の共感覚のはずだ。地名も、ノスタルジーの重要要素であると僕は思う。それが無くなりつつあるような気がする。

私は、「ああ、ドコソコの地にあの人が住んでいるのだな」という感慨をなるべく感じておくにはどうすればよいかを、いつも考えている。例えば、最近皮肉なことには、相手が若い知人・友人である場合、ただ味気ない住所を書いたり印刷したりした年賀状を出すことより、心を込めて長い電子メールを相手に送信することのほうが、僕は好きになってきている。メールだと、味気ない住所を書く手間を省くことができるし、相手のことを心から思い起こしながら本文の入力に集中できるからだ。

今後はもっと、「書きたい内容があるのに、書きたい住所がない」時代になっていくのではないだろうか。そうなれば、「形式的な年賀状」でも「軽い電子メール」でもなく、かえって「丁寧な心を込めた電子メール」こそ、日本語という言葉の美しさを味わい続けるための命綱であるという気がしてくるのだ。

だから、僕はここ数年は、疎遠になった知人や仕事関係者への形

式的な挨拶のほうを年賀状のみにして、逆に、僕の中で特別に大切な人たちには、年賀状も出すものの、あえてその後に、年末年始を避け、時間をかけ心を込めて、長い電子メールを「手紙」として送ることもある。もちろん、頭語・結語、時候の挨拶などは手紙と同様の書き方をするところがあるし、全く手紙を書かないわけではない。本当は、手書きで手紙を書く機会をもっと増やしたいとは常々思っている。日本人としての心遣いや礼儀作法をどうしても守りたいという思いの果てがこの結果だというのは、何とも皮肉なことだとも思っているから。

しかし、それにしても、心を込めて読んでくれることが分かっている相手には、味気ない住所を綴る手間を通さずに、深い内容をメールで伝えることのほうが、よほど意味のある心温かい交流だという気がする今日この頃である。

■画像出典

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Tramway_at_Okayama_city_.JPG

第二部 マルクス

二〇一一年六月二十日 起筆、擱筆、公開

■おすすめ著作

『資本論』 『共産党宣言』 『経済学批判』 『経済学批判要綱』
『経済学・哲学草稿』

マルクスが人間の五感というものをどう見ていたかを、その著作だけから読みとることは難しい。しかし、『経済学・哲学草稿』における「人間の五感の形成は、現在に至るまでの全世界史の一つの労作である」という言葉には、マルクスの五感観というべきものが隠されている。

まだ西洋でも生理学的意味での「共感覚」の研究は日の目を見ていなかった時代であるが、おそらくマルクスは、現在は「共感覚者」と呼ばれている、本当に五感が混交している「化石的人間」の存在は知っていたに違いない。

吉本隆明はこれについて、「触覚・味覚・嗅覚のような古層の感覚が退化し、視覚・聴覚のような表層の感覚が進化してきた、という過程が、マルクスの言葉から感じられる」という主旨を『初源の言葉』で述べているが、吉本の分析は、悪くはないと思うものの、どこか目的論的自然観への傾斜のにおいを感じさせる点で、私には不満である。どうして、「労作と言える理由は、ただ共感覚が分裂して五感の形成に至るまでに、長い年月がかかったからである」と言わなかったのかと、少しじれたい思いがする。

すなわち、吉本の言う「触覚・味覚・嗅覚のような古層の感覚」とは、私にとっては、近代西洋的自我発見後の人間の「視覚・聴覚

のような表層の感覚」とほぼ同等に「表層」であるように思える。吉本が「アメーバのような感覚を身体反射として表出する段階」と呼ぶ、その「アメーバのような感覚」を、私はいわば「阿頼耶識の原帰属性である共感覚」と見ている。

このような観点から見ると、吉本よりもマルクスのほうが、生命体としてのヒトの感覚世界を的確に社会思想に取り入れたと思える。くもない。

それはともかく、マルクスの理想が最終的に失敗した理由は、私は二つあると思う。一つは、マルクスが人間の欲望を甘く見積もったことである。二つ目は、「マルクスが同時代に見た西洋文明の欲望は、分裂した五感が生起させた」ことに言及しなかったことである。前者については、マルクスの極度の優しさが邪魔をした。後者については、マルクス自身の生まれ持った強大な西洋文明の風土が邪魔をした。

社会が完全に持続可能な共産社会であるためには、社会の構成員の知覚が総じて基層感覚的・共感覚的でなければならぬことになり、マルクス自身が本能的に欲求している社会はそのような社会であると思えるのに、唯物史観の果てにある現実のマルキシズム社会では、分裂した五感が生起させる欲望を常に抑え続ける必要があった。マルキシズムは、マルクスの理想ともまた違っていたということなのだろう。

第三部 小室直樹

二〇一一年九月八日 起筆、攔筆、公開

■おすすめ著作

『ソビエト帝国の崩壊』、『新戦争論』、『日本教の社会学』、『日本人の可能性』、『国民のための経済原論Ⅰ・Ⅱ』

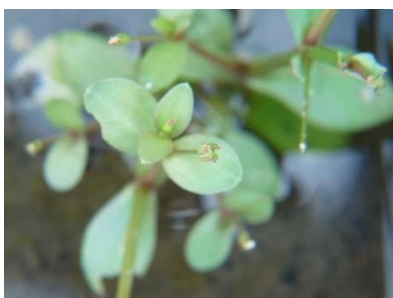
『ソビエト帝国の崩壊』は、私が生まれる前に出た著作である。実際にソ連が崩壊したのは、私が九歳の時であった。それからさらに十年後に、本著を読むことになった。

ソ連崩壊が過去のものとなり、米国の一人勝ちとその後の同時多発テロ、中国の台頭ばかりが目立つ今となつては、内容が古いという評価も多い本著だが、私にとっては、本著は「ソ連崩壊を正しく予言した」稀有な努力家の書いた書物として心に残っている。

出版当時は、多くの日本国民にトンデモ本として受け止められた。しかし、私は「努力する天才の眼には、少なくとも十年先が見えていく」と思う。本著が出ておよそ十年後に、ソ連は崩壊した。

ということとは、十年後のアメリカや中国、そして十年後の日本がどうなるか、見えている人には見えているのだろう。そして、その人は、今現在にはトンデモ学者と言われている人のうちの誰かなのかもしれない。

「心技体」という言葉がある。私は、アメリカは「体」から、中国



二〇一一年九月八日 起筆、攔筆、公開

第四部 私の思う「愛国心」や「愛郷心」について

は「技」から、そして日本は「心」から崩壊するであろうと感じている。しかし、この私のなげなしの知性による身勝手な予想は、小室直樹氏の網羅的で深遠な先見の明に比べれば、非常に偏狭なものだろう。

小室氏は、ソ連崩壊の十年前から、そのことを、「予言」した上に「断言」したように思う。この精密さは、機械的精密さというよりは、動物が人間よりも早く地震を察知して逃げるとききの五感の精密さのほうに似ていると、私には思える。

今回は、「愛国心」や「愛郷心」についての私見を書いてみようと思う。ここでは、「国家」や「出身地」という概念への愛というよりも、その「国家」や「出身地」を下から支えているその土地固有の動植物・農作物への感謝の念・観察眼・洞察力としての「愛国心」や「愛郷心」についての話である。

私の故郷岡山では、侵略的外来種であるヌートリア（ネズミ目ヌートリア科）の異常繁殖により、地元のいくつかの動植物が壊滅状態に追い込まれており、自治体も毎年数千匹規模のヌートリアの殺処分を奔走している。

元々は、その毛皮を日本軍の軍服・防寒服に使うために欧米から輸入した動物であった。日本は欧米の動物の毛皮を身にとって欧米と戦ったのだという現実を、忘れてはならないと思う。

私は、小学四年生のときに、学校の裏山でヌートリアを捕まえて、そのままわざと逃がしたことがある。最初は、つかまえてから自分の手でヌートリアの体を叩いてみようと思っていた。それは、ヌートリアによって壊滅状態に追い込まれつつあった岡山のベッコウトンボに対する愛情から出た、子どもなりの精一杯の仕返しのもりだった。

ところが、初めて見たヌートリアの目には、「動物の眼光の強さと温かさ」があった。私が子ども心に、「ヌートリア」と「ベッコウトンボ」の構図を、「欧米先進諸国」と「日本」の構図に重ねたらしいこと、そして、結局は「動物に罪はない」という判断を下して逃がしたのであることが、今になってようやく論理的に分かるばかり

である。

そして、二十年が経った今、岡山県内のベッコウトンボはほぼ壊滅、あるいは全滅したと言われている。こうして、「ヌートリアを叩き殺さなかった私の優しさが、ベッコウトンボを死に追いやった」という言い方もできる結果となったのであった。「不条理だ」と、しみじみ思った。このような体験は、ずっと頭に残るものである。

「日本らしい田んぼの畦道」の風景というものがあると私は思う。ここでの「日本らしい」とは、「日本列島が大陸と分断されて以降に長い年月をかけて育ってきた、水草・雑草・生物の固有種が豊かな」という意味のはずだと思う。

ところが、戦後になって、日本人の生活のアメリカ化と全く同じ形で、日本の植物もアメリカ化した。例えば、国産畦菜（アゼナ）はアメリカアゼナに取って代わられていった。

私のような植物学の素人でも、東京の郊外の田んぼなどを電車の窓からぼんやりと眺めていると、アメリカの田園風景かと冷や汗を掻くことがある。私には、いわゆる五感が混ざり合う心理学上の「共感覚」があるので、今の一般日本人よりも異常に敏感すぎるのだろうかとも、一時期は考えた。

確かに私は、小さい頃はネズミのしっぽをつかまえて遊ぶような少年であったし、おそらく「通常ではない」敏感さを持って自然や動植物を知覚・観察しているとは感じている。

ただし、物事の見方には微視的な見方と巨視的な見方があるとすると、小さなアゼナが国産か外来かなどということを見分けるには、

どんな「敏感人間」であつても、数メートル〜数十センチまで近づいて微視的に葉の形を観察しなければならぬはずだと思える。

ところが、そう思いきや不思議なことに、素人の私の目で、半ば怠けながら数十メートル離れた位置から見ても、「日本の懐かしい田んぼの畦道」の趣が感じられない場所が東京にもある。そこで、近づいてみると、本当にその周辺がほぼ全て外来種の植物であることがある。

今回の大震災被災地域のうち、宮城県は、全国で真っ先にベッコウトンボが絶滅した土地であったようだ。宮城県の田んぼはあまり見たことがないし、宮城県についてはほぼ仙台の中心部しか知らない私だが、それでも、今回の震災で流された東部の田畑の水草の中にも、欧米産のものが大量にあつただろう。

アメリカ両大陸に起源を持つ水草は、今や岡山の田んぼにも青々と、いや、ブルーブルーと輝いている。岡山県民の方がここをご覧になっていたら、悲しまれるかもしれないが、私の愛郷心は昔よりもずっと薄れてしまった。

今回の台風十二号で、岡山県玉野市の全域が避難勧告となったが、私の「ヌートリア体験」や「アメリカアゼナ体験」は、「現在の故郷（現在の日本）を愛する」という心を、少なからず冷めたものにしていく。

玉野市が雨に流されたと聞いても、アメリカアゼナが流された光景ばかりが脳裏に浮かんでくる。存在しないものは雨に打たれないのだから、壊滅したベッコウトンボが雨に打たれるはずもなく、雨

に打たれたのはヌートリアである。

「今回の震災で流されたのは、本当に日本であるか」、「今回の台風が通り過ぎたのは、本当に私の故郷であるか」といった、私自身が生み出したかなり意地悪な問いが、私の「愛国心」や「愛郷心」を邪魔しているようである。これは、私だけに当てはまる、あくまで個人的な思想の問題なのだろうか。それとも、日本社会全体で考えてみる意義のある課題なのだろうか。

人間は不条理な生き物で、自分が愛するものの消滅しか深く悲しむことができないようである。

「全人類の命が大切だ」と頭では思っている、我々日本人は、毎日毎日世界中で餓死している子どもたちを思って涙するわけではない。けれども、身近な人の死には簡単に涙するわけではない。「今回の自然災害で壊滅したのは、紛れもなく日本である、我が故郷である」ということが言えなければ、私は残念ながら、深く悲しむことができないようである。

私は一人の日本人男性として、自分のこの心情に一種の皮肉と同情を覚える。この心情は、かつて三島由紀夫が、「もし先の戦争に勝っていたとしても、日本刀で戦ったのではなく、欧米の技術で戦ったのだから、日本が勝ったとは言えない」という主張をしたことに似ていると感じる。

私は、三島由紀夫の最期の血を流した行動の是非の議論はともかくとしても、その「日本観」や「日本感覚」は本質を突いていると今でも思っている。三島由紀夫のように、「愛国心」や「愛郷心」を

軍事技術に喩えて主張すると、色々と異論もあるだろうが、同じことを動植物や我々人間の身体について言えば、いかに「日本の風土」という概念が崩れかけているかがよく分かると私は思う。

我が国は、自分たちで食べるものの多くを自分たちの手や自分たちの土地で生産していない国である。「和食」と「洋食」の違いは、加工後のスタイルの違いであって、原材料から見れば、多くは「洋食」化している。「ほとんどのものは自分たちの田んぼや畑で作るが、どうしても足りないものだけ輸入する」という意識が、我々から失われつつあるようである。醤油の味も、だんだんと懐かしい味がしなくなってきた。

我々の身体の大部分は、外国人の労働のおかげで外国の農場においてでき上がったものを食べることによって、その外国産の食べ物の粒子で構成されている。これによって、日本人の死因のトップは全て欧米式疾患に入れ替わった（癌・脳卒中・心疾患など）。

主に日本産の農作物を原材料とする和食を食べ続けたことによる、戦前までの死因のトップは、肺炎・気管支炎・全結核・胃腸炎・老衰などであった。この頃にはすでに癌・脳卒中・心疾患の存在が知られていたにもかかわらず、それよりも上位に肺炎・老衰などが位置していたという意味であり、老衰の分類の中に癌などがあるのではない。

「有機体である生物が、その生物が生まれた土地以外の土地で生まれた有機物を短期間に大量摂取すると、拒否反応が出る」という現実への危機感を、我々はもつと持つべきではないだろうか。日本人

という有機体が、たったの数十年で他の土地の有機体である動植物を胃に入れるようになった事実を、もっと真剣に見直した方がよいのではないだろうか。

特に日本は、海で他の土地と隔てられているために、多くの野生動物や野菜などの農作物の固有性が、ユーラシア大陸やアメリカ大陸と比べて歴然としている。この数千年に渡る異質性を、我々日本人の身体・内臓がたった数十年で埋め尽くせるとは思えない。

もっとも、私とて、このような主張をしながら、その体の大部分は外国産の食べ物で出来ていると思われる。私は、自分にできる範囲で、なるべく自分の考えに合うような食生活をしているつもりではあるが、それでも限界というものはあるのは仕方ない。

「懐かしい日本製の田んぼの畦道」という心象風景を脳裏から薄れさせることに長けていない性質、自然の変化に敏感な性質の日本人であればあるほど、かえって今の日本を心から愛すること、大震災や台風被害を心から悲しむことは難しいかもしれない、私にはそう感じられる。個人の問題ではなく、日本人全体の問題なのだろうと思う。

いつかまた次回の大震災・大津波が襲ってきて、家も田畑も流されたとき、「ああ、今回流されたのは、確かに懐かしい日本の風景であった。今回ばかりは、悲しみもひとしおである」と我々が心から言えるように、これからの日本の文化・政治・経済を構築していかなければならないのではないだろうか。

結局、今回の記事も、最近書いてきた各記事と根を同じくしてい

ると思う。つまり、何度か書いたように、「虚無的殺風景」の直前までは美しく目に見え続ける「花」や「もみぢ」を今から作るうということだと思う。「次回の津波や台風には、本物の日本製の田んぼを触らせてやろうではないか」という気持ちで生きようということだと思う。

■画像出典

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Lindernia_procumbens.JPG